『地域創成研究年報』の創刊にあたって

現代の日本社会では，地方分権の必要性については，一般の認知を得ているといっても良いであろう。だが，その反面において，グローバリズムと市場競争原理の万能性が声高に叫ばれ，現実には，地域の自立は依然としておぼつかない状況におかれてしまっている。我々は，地域が，固有の価値を持った，人々の誇りある生活の場として自律的に発展するための条件は何かを，ここで問いたいと思う。地域の固有の価値を問い，地域の輝きを失わせている真の原因は何かを問うことから始めたい。さらに，大学が地域社会の一員であることを自覚するならば，大学がその倫理と論理とに立脚して「地域創成」を根源的に追究するという課題が，重要な責務として提示されるはずである。

冷静に現実を見たとき，地域が危機的な状況にあることの事例は，枚挙にいとまがない。地域の固有性は近年の社会経済情勢のなかでかすみがちであり，さらには忘れ去られようとしている。こうしたなかでは，ナショナルな価値観やグローバルに流通する価値観を野放図に地域に持ち込むことは危険である。そればかりではない。かかる手法は，地域の人々が自らの拠って立つ所に確信を持ち，自らの生活の本来の充実に向けた永続的な改革の構想としての「地域づくり」への努力を行なう側にとっては，負の効果しかもたらさないともいえる。直面している知の課題は，第一に，地域に固有のものと普遍性を有するものとの歴史的・構造的な絡み合いを解明し，全体構図のなかに地域的なるものの価値を把握することであり，さらに，その作業の不可欠の内容として第二に，「地域創成」に向けての構想を多面的に描き出すことである。

21世紀の市民生活のありかたとして，学術文化の香気が日常の暮らしのなかで享受され，心豊かな生活にふさわしい時間と空間が創出されなければならない。この点に異論を唱える者はいないだろう。今日，大学が地域にあるというとき，大学が知的に立ち向かうべきことは，何よりもまず，地域とは何か，地域の固有の価値とは何かを，科学的にその研究方法を模索しながら，解明することである。そしてそれは，大学を改革するなかで，地域と大学とがどのような共助的関係をつくり，市民と大学との連帯を育むことができるかという課題に到達する。それはまた，大学を不可欠の構成要素とした地域社会とはどのようなものなのか，あるいは地域の文化形成の能動的ファクターとして大学の社会的機能はいかに評価されるのかという問いに答えることでもある。

本センターは，学内外の人々の参画を得て，以上の課題を意識しつつ，個々の研究上の関心を尊重しながら，国内外各地における様々な事例を視野に収めた地域研究を遂行するものである。その研究成果を公表し適切な批判を受けるために，ここに『地域創成研究年報』を創刊する。

2005年9月

愛媛大学地域創成研究センター
『地域創成研究年報』編集委員会